

明治期における児童博覧会について (1)

是澤優子

(平成6年9月30日受理)

A Study of "Child Exposition" in Meiji Period (1)

Yuko KORESAWA

(Received September 30, 1994)

はじめに

明治期には、内国勸業博覧会をはじめとして多くの博覧会が開かれているが、その中には「児童」に焦点をあてて開催された一連の博覧会がある。このような博覧会がなぜこの時期に企画開催されたのか、その成立経過を掘り起こすことは、日本における新たな児童観の成立という意味から考えても興味深い。

その第1報として、本稿では、日本最初の児童博覧会といわれている明治39年の「こども博覧会」(東京上野)に注目し、その意義を考察する。

この「こども博覧会」は「学校および家庭の教育上に資すると同時に、子供に清新なる娯楽を与え」¹⁾ることを目的としていた。そのため、子どもの衣食住、読み物、玩具、絵画等、子どもに関する製作品を古今東西のあらゆる部門から収集しようと試みたという。

その実態はどうであったのか、まず博覧会の概要をふりかえることから始める。

1. 日本最初の児童博覧会「こども博覧会」開催の動機

明治大正期は多くの博覧会が開かれ、子どもに関連する物品の展示も行われている。例えば、明治6年には湯島聖堂の大博覧会内に童子館を建て内外の育児参考品を陳列したのをはじめ、内国勸業博覧会などでも家庭教育品が出品されている。しかし、子どもそのものに注目した博覧会が企画されるのは、明治後期からである。

その博覧会が前述の「こども博覧会」である。これは、明治39年5月4日より同16日までの約2週間、教育學術研究会²⁾の事業として東京の上野公園第五号館で開か
児童文化研究室

れた。開催に至る事情は次の通りである。即ち、明治38年9月頃、沼田藤次(作家)³⁾、樋口勲次郎(教育学者)⁴⁾の間でフランスのパリで開催された「こども博覧会」が話題になり、日本でも「この方面に早く手をつけねばという話」⁵⁾になった。

そこで、樋口が、教育學術研究会の機関紙発行所である同文館の社員に話したところ、「教育上有益な会ではあり、殊に趣意が面白いから、開催の場所と期限とが都合よく得られて、賛助して下さる人があれば、開いて見ようか」⁶⁾ということになった。翌年は、丁度同文館の創業10周年にあっていた。そこで「何か教育的事業を行うて、社会に貢献したい」⁷⁾ということで博覧会の費用の大部分は同文館の寄付で賄うことができた。

実際の運営は、10月17日に福田琴月(作家)⁸⁾、沼田等が、以前パリ「こども博覧会」を視察した久保田米斎(画家)⁹⁾を訪ね開会の準備の相談をした。その後、東久世伯爵に会長を依頼し、沼田等は賛助員集めに奔走したという。

沼田は、11月19日の日記に「午前、談合して子供博覧会いよいよ開催のことに決す。場所は上野公園五号館にて、日限は4月30日より5月19日までの間なり。」¹⁰⁾と記している。そして、12月1日第1回幹事会において大体的方針を決定し、出品物の部分分け、幹事の分担を決めた。ちなみに、役員は以下の通りである。

会長 東久世伯爵

幹事 豊原清作 沼田藤次 吉浦祐二 久保田米斎

桑谷定逸 福田琴月 塩谷清作

柴田常恵 樋口勲次郎 関以雄 杉原茂樹

明治39年にはいと、2月27日の総幹事会の後、幹事一同が品物の収集に奔走し、4月30日から会場の装飾や

出品物の陳列、余興などの手配をしたという。こうして、開催予定日より一日遅れはしたものの、5月4日「こども博覧会」は幕を開けた。

この「こども博覧会」の賛助会員には、多方面から多

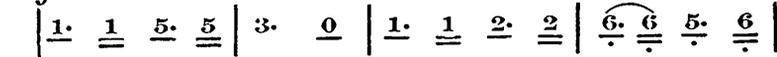
くの人物が名を連ねている。例えば、明治の文豪森鷗外をはじめ、東京市長尾崎行雄など95名に上る。この中には後の「児童博覧会」に積極的にかかわっていく巖谷季雄（小波）、坪井正五郎¹¹⁾、高島平三郎¹²⁾、松本孝次

こども博覧会

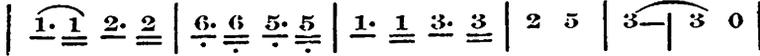
快活 =

(と調二拍子)

田村虎藏 作曲



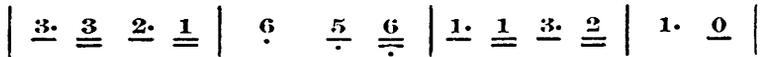
1. カゼ カヲ ル ウヘ ノノ ヤーマノ
 2. イザ ヤイ ザ マ ナ ビ ノ ヒーマニ
 3. ウツ クシ ク キ コ ユ ル ガク タイ
 4. ミ ア グ レ バ デ ー ン キ ジ カ ケ ノ



アーヲバワカバノソノモリカゲニ
 トモウチツレーラツドヘヤツドヘ
 ボツチャンガロサンキタレトヒビク
 カアイイニンギロガソラハシリユク



ヒ ラ イ タ ヒ ラ イ タ
 ユ ケ ー ヤ ユ ケ ー ヤ
 イ ソ ー ゲ イ ソ ー ゲ
 ミ ヨ ー ヤ ミ ヨ ー ヤ



タノシキコドモハクランカイ
 タノシキコドモハクランカイ
 タノシキコドモハクランカイ
 タノシキコドモハクランカイ

図1 こども博覧会唱歌楽譜

郎¹³⁾、日比翁助(三越専務取締役)¹⁴⁾等の名前も見られる。

2. 「こども博覧会」の構成

博覧会へは、91個人、37団体(幼稚園、小学校、盲啞学校、女学校、出版社、博物館、農商務省等)からの出品があり、それらを第1部から第6部に分けて陳列した。ちなみに、東京家政大学の前身である東京裁縫女学校も第6部に衣服類18点を出品している。¹⁵⁾

出品物の分類は以下の通りである。

第1部：図書、絵画、写真、彫刻品、文房具類。

第2部：衣服調度類。

第3部：体操、音楽に要する諸器械類、食料品、住居に関するもの。

第4部：玩具、遊戯に関するもの。

第5部：児童の製作品。

第6部：児童教育上の参考品、各部に漏れたもの。

特に、第4部は子どもだけでなく大人にも多大な興味を与えたという。

また、児童心理学者、文学士、医学博士などによる講話会も企画されていた。こども博覧会における講話の日程、講演者と題目は次の通りである。

5月10日 午後3時 大村仁太郎「玩具と子供」

13日 午前11時 坪井正五郎「世界の中の子供」

午後3時 三島通良「母の任務と子供」

14日 午後3時 樋口勲次郎「子供に対する親の義務」

15日 午後3時 高島平三郎「子供に関する講話」

16日 午後1時 巖谷小波「こども魂」

17日 午後1時 富永岩太郎「玩具の与え方」

この博覧会のテーマ曲ともいえる唱歌が、福田琴月(作歌)、田村虎藏(作曲)により作られた。「こども博覧会」の唱歌は、開会中、楽隊が会場の入口で連日演奏し、更に唱歌を印刷したものを、入場者に配付した。会期中は勿論のこと閉会後も子どもたちに親しまれ歌ってもらえることを望んでいたということである。(図1)¹⁶⁾

その他、会場構成の主だったものとして、模範小児室、休憩室、売店などがあげられる。(図2)¹⁷⁾

模範小児室は、当時の住生活に適應するため、大体の構造を日本式の建築とし、広さは8畳。但し、従来の畳を廃し敷物をリノリューム(輸入品)にし、汚れても雑巾で簡単に拭き去ることが出来るようにした。また、テーブル、イス等を用いて和洋折衷式とした。

「こども博覧会」の休憩室には、「オルガン、ブランコ、ピンポン、のぞきめがね、こまたまつきあそび、蓄音機、電気仕掛けの電車」などが備えられ、子どもたちが自由に遊ぶことが出来た。そこで遊ぶ子どもたちの姿を見た沼田笠峰(藤次)は「休憩室のこども」¹⁸⁾のなかで、「子どもの遊戯若しくは娯楽を得る方法については、わが国の家庭では、一般にまだ殆ど何等の設備も無い。活動力の盛んな子供は……身体のためにも精神のためにも、善い遊びを与えて、その活動力を有効に発展せしめねばならない」子どもたちの遊び方について、親たちが極めて冷淡で無頓着だから子どもはやむを得ず悪い悪戯をするのであって、子どもの娯楽に適当な設備があれば、必ず清新なる趣味を得るであろう。したがって、休憩室における子どもを見た親たちは、「子どもの遊ばせ方について、或る新しき知識を得られたであろう」と述べている。

売店を出すことに関しては賛否両論があった。しかし、この会の趣意に悖らないものだけというせんに沿って、同文館の書籍雑誌、明治から大正にかけて「教育玩具」販売で大成功した小島玩具店のほか哺乳機器、菓子、草花、コーヒー店等が設けられた。そこには、来場者のニーズに応えるための配慮がみられる。

3. 「こども博覧会」の特色と意義

この博覧会の大きな特色は、「児童」を中心に据えて企画された最初の博覧会であったことである。しかし、最新の知識を広く集め普及し、また児童に清新なる娯楽を与えるという博覧会の目的は果たせたのであろうか。

その趣意書に「子供その者の競進会に非ずして、子供の為の博覧会なり」¹⁹⁾とあるように、子どもの作品を集めその優劣を競い合うのではなく、子どもにとって有益な参考品を集め、児童の生活や教育上の新しい知識を普及する為に開催した博覧会は、時勢に適合したものであった。

博覧会が家庭教育の重要性を打ち出していたことは、展示品が子どもの衣食住から教育、娯楽にまで渡っていたことからもうかがえる。

また、玩具の教育的意義も意識されはじめていたようだ。松本孝次郎は「こども博覧会について」²⁰⁾の中で、玩具の進歩の程度はその国の文明開化の発達程度を示すということは、ほぼ児童学者の間で定論となっていると述べ、児童教育における玩具の必要性を次のように説い

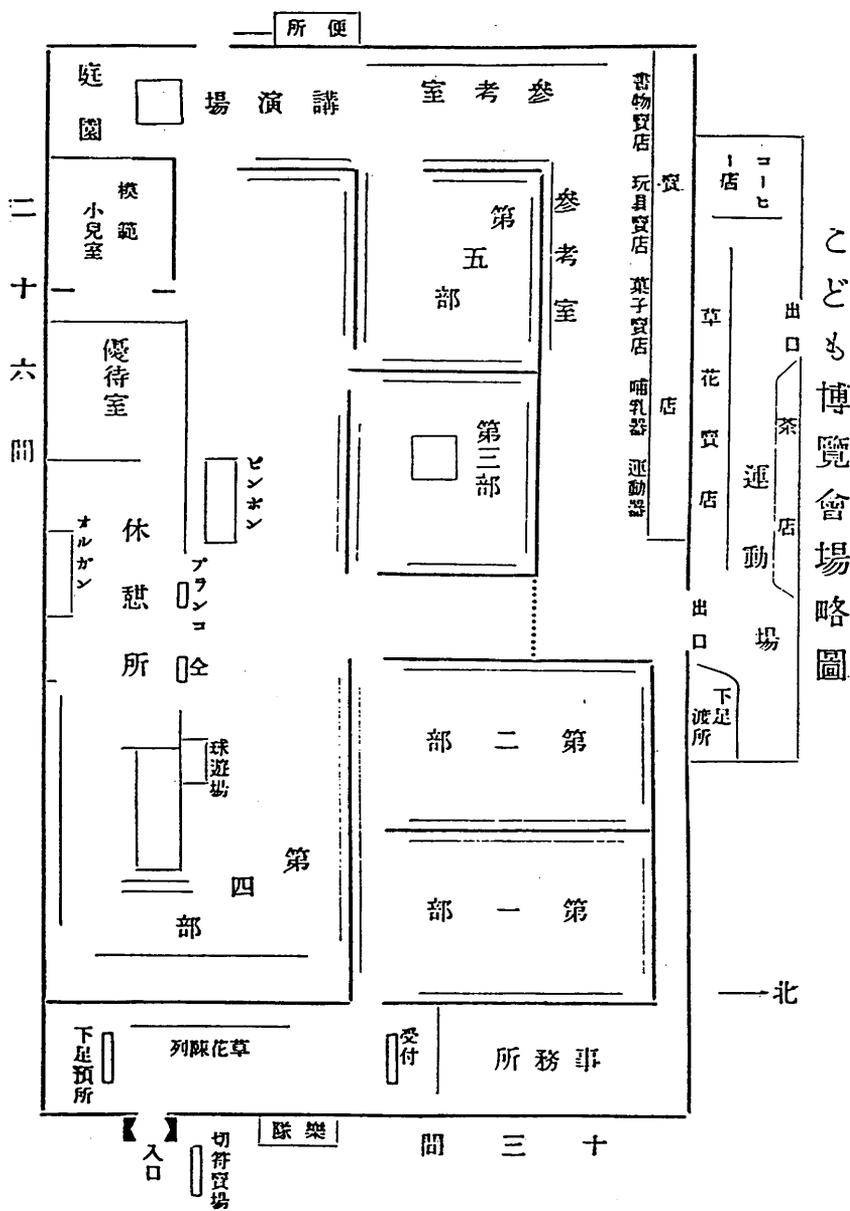


図2 こども博覧會々場略図

ている。「我が国に於いては教育上用いたるところの玩具の如き類は、すこぶる欠点の多いものであって、日本の玩具は最も壊れやすく、又最も不完全に出来ているようなもので……而もかかる玩具は、児童の家庭時代に於ける教育から申しますと、欠くべからざる必需品であ

りますから、もう少し日本の玩具を改良したい……」この博覧会は、純然たる教育的事業であり営利の念をはなれたものであったという。そこには「こども博覧会」の実現にむけた人々の意欲と努力が見られるものの、博覧会に関して、不十分な点の指摘や反省の声もあった。

例えば、会場の広さ、出品物の展示の仕方等が挙げられている。また、自らも参考品を出した巖谷小波は次のように述べている。「遺憾に思ったのは、折角あれだけの計画をしながら、出品に対して審査の行われなかったことでした。すでに博覧会と称して諸種の出品を促した以上は、之に対して又審査を行い、褒むべきは褒め、貶くべきは貶けないでは、所謂の佛造って魂を入れぬ様なもの、如何にも物足りない心地がしたのです」²¹⁾。集まったものをただ陳列するのではなく、出品物が子どもの教育上参考になる物であるかどうかを審査する必要性を指摘している。

後にこのような問題点への反省から、巖谷小波等を中心に「三越児童博覧会」が開催されることになる。

以上のように、教育學術研究会主催の「こども博覧会」は、出品物などに十分な整理と検討が加えられていないなど多くの問題点を含んでいた。しかし、一方では、各地の児童博覧会の先駆けとなり、ひとつの形を提示した。そして、それはその後の、全国各地で展開される児童博覧会の呼び水となったのである。

4. 「こども博覧会」の影響

明治39年以降の「児童博覧会」の動向

明治39年の東京上野「こども博覧会」以降、日本各地で児童博覧会が企画開催された。現在、筆者が確認できた限りでは、同年11月、京都教育会主催「京都こども博覧会」、大阪博物場「第1回こども博覧会」、明治40年、彦根城山「こども博覧会」、福岡県「子供博覧会」、明治42年から毎年開かれた東京三越呉服店「児童博覧会」、明治44年、大阪博物場における「第2回小児博覧会」、5月「島根県子供博覧会」、大阪箕面での「山林こども博覧会」、明治45年、「岡山児童博覧会」、名古屋いとう呉服店「第2回児童博覧会」などが開かれた。(表1) そのうち、特徴的なものをいくつか紹介する。

京都教育会主催「京都こども博覧会」²²⁾

明治39年11月1日より25日間、市教育会主催で岡崎公園を博覧会場とし開かれた。玩具、人形、文房具、小学校生徒の手工品等の出品物展示、余興運動場、府立図書館臨時設計による児童図書館、幻燈室、売店、飲食店等の他、出品物の審査も行われた。

表1 明治期の主な博覧会と児童博覧会

明治6年	湯島聖堂の大博覧会内に童子館を建て内外の育児参考品を陳列
明治10年	第1回内国勲業博覧会
明治14年	第2回内国勲業博覧会
明治23年	第3回内国勲業博覧会
明治36年	大阪勲業博覧会
明治39年	※教育学術界主催「こども博覧会」(上野) ※京都教育会主催「京都こども博覧会」 ※大阪博物場にて「第1回こども博覧会」
明治40年	※彦根城山「こども博覧会」
明治42年	※東京三越呉服店にて「第1回児童博覧会」
明治43年	※東京三越呉服店にて「第2回児童博覧会」 ※福岡「子供博覧会」
明治44年	※大阪博物場にて「第2回小児博覧会」 ※東京三越呉服店にて「第3回児童博覧会」 ※「島根県子供博覧会」(松江市) ※「山林こども博覧会」(大阪箕面)
明治45年	※「岡山児童博覧会」 ※名古屋いとう呉服店「第2回児童博覧会」 ※東京三越呉服店にて「第4回児童博覧会」

※印が児童博覧会

福岡県「子供博覧会」

明治43年第13回九州沖繩八県総合共進会の先駆けとして計画された各種の小共進会のひとつとして、明治42年10月1日から10月21日まで福岡市にて開催された。

この博覧会は、「家庭に於ける児童訓育の改善及び其嗜好、需用を研究せんとするものにして、治ねく作製品を蒐集陳列し、彼等に清新なる趣味を与ふると同時に教育上の知識啓蒙に資し、他の一面に於ては工芸に関する技術の観念を発作し、其向上的思想を鼓舞せんとする」²³⁾ことを目的としていた。

山林こども博覧会

明治44年10月10日から10月31日まで、大阪箕面公園、箕面動物園、箕面公会堂、大運動場を会場に、箕面有馬電気軌道株式会社が開催した。

「……単に其の用品の改善のみに止まらず、一面に於ては児童の清新なる一大娯楽場たらしめざるべからず、……大阪の如き大都会の児童には特に多く自然に接触せしむるの機会を与ふるを以て児童教育上の一大要義なりと信

ず……」²⁴⁾として、児童用品、児童の製作品、参考品の出品の他、汽車旅行子供花電車、模範的活動写真、少年音楽隊、動物仮装行列等の催しがあった。

「岡山児童博覧会」²⁵⁾

岡山商工会議所の主催により市共賛会の事業に移り、明治45年3月20日から4月30日、東山公園の千七百坪を会場に、バラック式の本館（二百坪）と、動物園、花人形お伽演劇、活動写真などの余興館、また、模型飛行機大会、児童競技会、総合運動会、少年演武会等を会期中に催した。また、岡山県立女子師範学校教師、信原継雄（作歌）、富岡しづ（作曲）による「岡山児童博覧会」の唱歌が作られた。

東京三越呉服店「児童博覧会」

明治40年、小児部を開設した三越は、日比翁助が洋行する際、児童用品の陳列所を作ることを助言した巖谷小波を明治42年2月顧問に迎え、同年4月1日から5月15日まで「第1回三越児童博覧会」を旧店舗跡の広場で開催した。

「……児童そのものを陳列し、若しくは児童の製作品を陳列する者にあらず、……衣服、調度及び娯楽機具類を、古今東西にわたりて、あまねく鳩集し、又特殊の新製品をも募りて、之を公衆の前に展覧し、以て明治今日の新家庭中に清新の趣を添えんことを期し」²⁶⁾て開かれた。出品中、新意匠や新考案の物に対して審査を行い、優秀な物には記念賞が贈呈された。「三越児童博覧会」は、これをかわきりに大正、昭和に渡り度々開かれた。

また、三越は自らの企画による博覧会だけでなく、児童用品研究会²⁷⁾を通して日本各地の児童博覧会に影響を与えていった。

おわりに

「児童」への関心の高まりと欧米の児童博覧会に刺激を受け、明治後期に開かれた一連の児童博覧会は、衣食住、教育、娯楽等の新しい知識を通して子どもの生活をより向上させようとするものであった。

そして、教育上の新しい知識の普及と子どもに清新なる娯楽を与えることを目的とした明治39年の「こども博覧会」は、様々な反省点や問題点を残しながらも我が国における博覧会の新しい方向性を開いたといえる。

学校教育の面からだけでなく、家庭教育や娯楽をも含

めた子どもの生活全般を視野に入れた「こども博覧会」の考え方は、のちの一連の児童博覧会に受け継がれ発展していくのである。しかし、明治後期は児童学の開拓期といわれ子どもについて専門的に研究されはじめた時期とは言え、いまだ日本の児童研究は欧米の理念を学ぶことが先行し、自国の子どもを取り巻く具体的な物と実践を結び付けたところでの児童理解は浅かったのではないか。

やがて大正期には、教育、生活等を包括した文化という広い視点から子どものより良い生活を考えるようになっていく。その前段階として明治期後半、各地で開かれた児童博覧会は、児童文化と言う概念を生み出す前段階の日本にあって、新しい認識を広く人々に持たせる啓蒙的な企画であったと言える。

これら一連の「児童博覧会」の児童史的見地からの位置づけは今後の課題としたい。

註

- 1) 「こども博覧会趣意書」 『日本の家庭』臨時増刊 第3巻第4号 P. 38 同文館 1906
- 2) 明治32年発足した教育学会から翌年に分裂。樋口勘次郎、中島半次郎等が中心となり、会の名称を教育学術研究会とあらためた。機関雑誌『教育学術界』を発行。
- 3) 1881年～1936年。児童文学史の上では一般に沼田笠峰の名で知られている。同文館、博文館で編集に従事。少女小説の作家としても活躍した。
- 4) 1871年～1917年。児童の自発活動を尊重して注目された教育学者。
- 5) 沼田藤次「こども博覧会は如何にして成りしか」 『日本の家庭』臨時増刊 前掲書 P. 43
- 6) 沼田藤次 同上。
- 7) 同上。
- 8) 1875年～1914年。本名喜八。「少年世界」「少女世界」等に児童向けのお伽噺を書いている。
- 9) 1874年～1937年。本名満明。日本画家、舞台美術家。児童向けの本の挿絵も手掛けた。
- 10) 沼田藤次 前掲書 P. 45
- 11) 我が国における「人類学の父」と言われている。また、郷土玩具の収集家としても知られ、「ずぼんぼ」など数々の玩具を考案した。
- 12) 1965年～1946年。児童心理学者。当時は、日本女子

明治期における児童博覧会について(1)

- 大学講師。雑誌『児童研究』の顧問を務めた。
- 13) 1870年～1932年。高島平三郎らと雑誌『児童研究』を創刊。我が国における児童学の樹立に貢献した。
- 14) 1860年～1931年。明治37年の(株)三越呉服店の設立にあたり、初代専務取締役役に就任、次々に新しい事業を打ち出し、「百貨店界の巨人」と呼ばれた。
- 15) 日本男子禮服衣冠束帯、日本婦人の禮服十二単衣、西洋婦人の服装、韓国婦人の禮装を出品した。
- 16) 『日本の家庭』前掲書 P. 41
- 17) 『日本の家庭』前掲書 P. 42
- 18) 沼田笠峰(本名 沼田藤次)「休憩室のこども」『日本の家庭』臨時増刊 前掲書 P. 65
- 19) 「こども博覧会趣意書」前掲書。
- 20) 松本孝次郎「こども博覧会について」『日本の家庭』臨時増刊 前掲書 P. 23
- 21) 巖谷小波「私と児童博覧会」『みつこしタイムス』臨時増刊 第7巻第8号 P. 157～158 1909
- 22) 『風俗画報』 335号 1907 東陽堂
- 23) 『児童研究』 第12巻3号 日本児童研究会 1909
- 24) 『児童研究』 第15巻3号 日本児童研究会 1911
- 25) 『児童研究』 第15巻9号 日本児童研究会 1911
- 26) 「児童博覧会開設趣意書」『みつこしタイムス』第7巻第3号 1909
- 27) 「第1回三越児童博覧会」盛況を受け、巖谷小波、高島平三郎、三島通良などが発起人となり創設。児童博覧会審査委員を中心に児童用品の研究、改良などに務めた。

参考文献

- ・『株式会社 三越85年の記録』 1990

付記

- ・人名及び引用した文章は、一部、現代仮名遣い、当用漢字に変えたところがある。
- ・本稿の執筆にあたる資料の収集に際し、平成5年度佐藤玩具文化財団奨励金の助成を受けた。(『教育玩具』出現に伴う伝統的人形玩具観の変遷』共同研究者 是澤博昭)